

## 『白鯨』のかくれた意味と象徴について (4)

前 田 禮 子

今回は主として、『掛け布団』(‘Counterpane’)<sup>1</sup>の意味について考えてみる。Counterpane という語には、たがいに符号し合うものの片方、の意がある。

掛け布団の模様と、Queequeg の腕にほどこされた文身いれずみの模様や色合いが、まったく符号するものである、などということは、偶然の一致ではありえない。そこには運命的な、大きな何ものかの配慮が働いている、と Ishmael は、いいたいのだろう。Queequeg の腕が Ishmael を抱いているのを見て、Ishmael は、ふしぎな感覚におそわれて、幼い頃の同様の経験を思い起す。真夜中に目を覚ましたとき、なにか物の怪が、闇の中にすわっていて、自分の腕にじっと手を置いている、と Ishmael は感じた。Ishmael は、幼いとき、この日は午後からずっと継母のために断食をよぎなくされている。この日は、6月21日、夏至の日である。Pequod 号が出発する日はキリスト降誕の日であり、Ishmael が Queequeg の腕が自分を抱いているのを見たのは、その一週間前の主日である。この期間は冬至祭と前後する。この作品では、儀式めくことが起るのは、ほとんどが季節のある特定の時期に一致するように仕組みられている。第1章 *Loomings* に、牧歌的な瞑想風景があった。キリストが幼年時代を送ったエジプトの風景をおもわせる。その時は6月、そこには、おに百合が咲いていた。おそらく夏至の頃であろう。夏至祭は、Joseph の日とされ、百合の花が飾られるからである。

Ishmael は、自分のことについてほとんど語らないが、子供のときの、この日の神秘体験については、くわしく語っている。一年の、もっとも太陽のさかんな日に、太陽にもっとも近い屋根裏部屋で、その夜、Ishmael は、なにかが自分に按手式めくものを施すのを感じる。その日の Ishmael の断食は、Queequeg の Ramadan と符号している。Samuel は、夜、ねむっているとき、神の呼び声をきいて、「しもべはききます、お話し下さい。」(Sam 3:9) といったが、Ishmael は、Peter Coffin の息子の Sam が使ったことのある寝台で、夜を過すことになる。そして Ishmael は、子供のときに、やはり寝台の上で召命とおぼしい経験があった。

At last I must have fallen into a troubled nightmare of a doze; and slowly waking from it—half steeped in dreams—I opened my eyes, and the before sun-lit room was now wrapped in outer darkness. Instantly I felt a shock running through all my frame; nothing was to be seen, and nothing was to be

heard; but a supernatural hand seemed placed in mine. My arm hung over the counterpane, and the nameless, unimaginable, silent form or phantom, to which the hand belonged, seemed closely seated by my bedside. (p. 53)

Ishmael は、16時間も寝台の上で過ぎなければならず、真夜中に夢うつつに目を覚ましたとき、あたりは完全な闇と沈黙につつまれていた。これは、*Loomings* において、Ishmael が夢うつつの心理状態から目覚めて、New Bedford へ出発したとき、季節が極北の状態にあるのと同じである。Ishmael は、一瞬、衝撃が体中に走るのを感じる。こういう衝撃は、巫女が神託を受けるときの、あるいは人が精霊を感じる状態と同じである。Ishmael は超自然の、見えない手が、自分の、掛布団の上にある手に置かれるのを感じる。Michelangelo の描く天地創造の絵画の Adam の創造の中で、神の手が Adam の手に触れて、生命が Adam に吹きこまれているのに相当するような図である。しかし Ishmael のかたわらに座っているものは、名状しがたく想像もつかぬ幻のようなものである。

Ishmael が、*Loomings* で、phantom of life (p. 26) と名づけたもの、意識の奥深い、おぼろな状態でかいま見た影のようなものが、すでに彼の子供時代に、Ishmael に接触したといえる。Ishmael は、子供の頃に、かたちのない幻の状態を経験した同じことを、今、Queequeg のかたちある手が自分に置かれているのを見て感じる。現象として表われるまえに、かたちのないものが、気配として先行する、ということになるだろう。そのことについて、Ishmael はつぎのようにいっている。

Now, taken away the awful fear, and my sensations at feeling the supernatural hand in mine were very similar, in their strangeness, to those which I experienced on waking up and seeing Queequeg's pagan arm thrown round me. (p. 54)

手と手をふれ合うことにより言葉を媒介せず、言葉を超越して、なにか霊的なものが伝達された、と考えられる。ある種の以心伝心が行われたものと考えられる。Ishmael の予言者的あるいは巫女的な側面が、こういうところから読みとることができる。

Counterpane という語は、掛布団の意として受けとるときには、第2章や第3章で undertone として強調されていた身体をおおうものの一つである。Counterpane は、blanket (p. 39), winding sheet (p. 39), door mat (p. 46), mattress (p. 47) や第2章の表題の Carpetbag など、一連の同種の語の一つである。しかし、Counterpane は、Counterpart や Counterpoint の意にも受けとることができる。pane には、part や point の意もあるからである。そうすると、Counterpane には、一対のものの片方、または、相対応するものが平行して存在する対位法、などの意がある。見える現象としての Queequeg の手と、見えない phantom の、現象に先行した手とは、それぞれたがいに Counterpane になる。見える事象と、見えない気配とは、たがいに平行して起っていくことになる。Mel-

villeが、この作品の中で、予兆や予言を多く用いているのは、単なる、荘重さを高めるための手法ではなく、見えるものと見えないもの、つまり物象とその精神とのあいだには、相関関係がある、という論法によるものだろう。精神が現象に先行するという考え方は、アメリカでは、いうまでもなく、超絶主義の考え方である。超絶主義は、さかのぼれば、Kant や Plato の観念論に源流を求めることができるのであり、*Moby-Dick* には、ヘブライズムやヘレニズムなど西洋の思想ばかりでなく、東洋の思想も、混然とふくまれている。西洋思想については、すでに多くの研究がおこなわれているので、どちらかといえば、東洋的な思想の側面から、*Moby-Dick* を眺めていくことになるが、Melville がどのような経路で、東洋思想にふれたのかは不明の部分が多い。いずれにせよ、*Moby-Dick* には、仏教的な東洋思想が、否定しがたく大きな部分をしめている。*Moby-Dick* には、超絶主義が大きく支配している。超絶主義はまた、仏教思想との関わりが大きいのである。

*Spouter-Inn* には、四方に暖炉のある大きな煙突がある。Ishmael が継母のお仕置を受けることになった原因は、Ishmael が煙突の中をよじ登ろうとしたためであった。

The circumstance was this I had been cutting up some caper or other—I think it was trying to crawl up the chimney, as I had seen a little sweep do a few days previous; (p. 52)

いずれのばあいも、煙突がなにかの表象になっているようである。第3章ですで見えてきたように、火山または柱の表象になっているようである。引用文の、ふざける、の意の cut up と caper の用法を見てみよう。I had been cutting up some caper or other. は、なにかを切り刻んでいるような文である。caper は、西洋ふうちょうぼくの実(植)、の意と、語源から見て、he-goat の意とがある。caper はまた、かすかに cape に掛けられてあるのがうかがえる。また、I think it was trying to crawl up the chimney の it は、I と書かれていであれば意味があきらかに浮き出るのが、it になっているために、some caper を指しているように見える。この it は叱られた理由をさしているだろう。I had seen a little sweep do の sweep には、煙突掃除人の意のほか、湾曲したもの、の意がある。caper を he-goat ととれば、a little sweep には雄羊のつもの、の意が、ひそんでいることになる。雄羊は、いうまでもなく犠牲の動物であるし、この日は夏至であるから、北半球では、太陽の日照時間ももっとも長く、この日の太陽には、また炉としての煙突には、雄羊を培ぶる火、の意があるだろう。つもの表象については、Cape Horn の豊穡や、地の柱としての岬の意など、すでにのべた。

... my mother dragged me by the legs out of the chimney and packed me off to bed, (p. 53)

I... undressed myself... and with a bitter sigh got between the sheets. (p. 53)

I lay there dismally . . . before I could hope for a resurrection. (p. 53)

引用文のそれぞれに、死と復活、の意がうかがわれる。packed me off to bed は、coffin に詰める、の意がある。つぎの、衣服をぬぎ、にがい溜息とともに敷布にくるまり、は、死を経験することを云い、わびしくそこに横たわり復活を望むことができるまで、は、文字どおり、復活を待ち望むそれぞれ通過儀礼である。Ishmael は、Spouter-Inn で死と復活を意味する通過儀礼を経験する以前に、幼い頃すでに、同じ通過儀礼を経験したことになる。その際、Ishmael は、目に見えないなにかと、接手式をかわしたことになる。Moby-Dick では、表層で勇壮な物語が展開するが、表層下でも、表層上のはなばなしさに劣らず、目に見えない動きが、大きく物語の進行に関与しているのがわかる。

この Counterpane の章では、相似する現象や事物が相対応して平行してあらわれて、構成が対位法になっている。Ishmael が、子供のとき、phantom を感じた日に、寝台に入るにさきだって、煙突の中に入ろうとしたことと対応するのは、Queequeg の木偶人形である。

For now the savage goes up to the empty fireplace, and removing the papered fire-board, sets up this little hunchbacked image, like a tempin, between the andirons, the chimney jambs and all the bricks inside were a very appropriate little shrine or chapel for his Congo idol. (p. 49)

木偶人形は、白鯨と同じように、hunchbacked になっている。それを薪架の上に置いて、けずり屑を燃すと、燔祭をしているように見える。炉の内壁のれんがと、脇柱のあいだに置かれて、木偶人形は、神殿の中央の偶像のようである。Congo idol の Congo は、黒さを強調しているばかりではない。Congo は緯度 0° に位置し、そこに赤道が走っている。Queequeg の木偶は、Ishmael が煙突の炉の中でふざけていた、と書かれていた文の I had been cutting up some caper or other. にかくされた意味の、caper をいけにえにしていた、と対応しあうことになる。caper には、岬のようなもの、つものようなかたちをしたものの意がくみとれるから、caper と木偶のかたちが共通していることになる。炉の中で燔ぶことは、単なる燔祭にとどまらず、やはり不死鳥を意識しているだろう。また復活には、夏至と冬至、赤道上の Congo など太陽が関与することがうかがえる。

衣服を着たり脱いだりすることも意味がありそうである。たとえば、魂が肉体を脱ぎ捨てる、など、変成を意味するようである。

Queequeg の朝の身支度は、彼の就寝儀式と同様、象徴的な意味がある。彼は夜は、復活を願う儀式を行っていたが、朝も同じく復活を願って、復活を先取りするための行為を行っているらしくおもわれる。Queequeg が、寝台の下に潜りこんで、じたばた激しくもがいているのを評して、Ishmael は、Queequeg は、現在過渡期にあって、毛虫でも蝶でもない、と云っている。

... his next movement was to crush himself under the bed ; when, from sun-dry violent gaspings and strainings, I inferred he was hard at work booting himself; (p. 55)

寝台の下から出てくるのは、死を経験する過程を経て、つぎの段階に移行する、といった意味があるのでないだろうか。Ishmaelはつぎのように云っているが、Queequeg, do you see, was a creature in the transition state—neither caterpillar nor butterfly. (p. 55) この文は、Queequegが変容の過渡期の状態にあるのをあらわしているようである。すでにのべたが、Ishmaelが、do you see, とか、shipmates と呼びかけたり、あるいは注意を喚起する語をさしはさんだりしているときは、その文には、特別な意味がある。

Queequegの身支度の特徴は、彼が帽子と靴を身につけることである。これは、頭と足、または頭と尾、を強調していることになるだろう。Queequegが寝台から飛び出して、跳ねまわるのは、どうやら、鯨が海底深くから水面に躍り出て、飛び跳ねるのをまねているらしい。

Queequegは、手や胸をいわば齋戒沐浴したあと、彼の頭の剃髪をはじめ。剃髪は、仏教思想にもとづく。髪をおとすのは、死を意味する。新しく生え出る毛髪は、復活を意味する。日々に生え、日々に刈りとる、これは、日々に死と復活をおぼえることである。また、これは、自然が、死と復活を日々に約束し、証しを示していることになる。またこれは太陽が、毎日、死と復活をくりかえして、生命が永遠であることの証しを与えることをまねているのである。ただ、このばあい、死と復活の永遠のくりかえしでは、輪廻の車輪の動きを認めることになり、輪廻の車輪にからまって、しょせんは、地上の生命をくりかえすにすぎず、同じところをぐるぐるまわりつづけるだけで、虚しさを禁じえない。人はいずれ、輪廻の輪をたち切って、間断することのない永遠の生命を願わずにはいられない。いずれにせよ、衣服を、夕べに脱ぎ、あしたに着けるのも、夜、寝台で休むのも、同じように、死と復活をおぼえるためのものとも考えることもできる。肉体の死と誕生も、朝夕の衣服の着かえや睡眠と目覚めと相似たものかもしれない。

もう一つ Counterpart になっているものがある。それは、馬車の表象である。

... the sun shining in at the window, and a great rattling of couches in the streets, and the sound of gay voices all over the house. (p. 53)

.. there stands the vast arched bone of the whale's jaw, so wide, a coach might almost drive beneath it. (p. 38)

Ishmaelが子供のときは、窓のそとで馬車の車輪の行きかう音が聞え、家の中では人々のさんざめく声がしていた。Spouter-Innでは、鯨の大きな拱門状のあご骨の中に酒場がしつらえてあって、そこは、馬車が十分通れるぐらいの広さがあった。馬車は、乗物であって、おそらく、移行や時間の経過、あるいは輪廻の表象であるにちがいない。時間は、永

遠，に対峙する反対概念であるから，馬車や人々のさんざめきは，現世や必滅の人間，などの表象になるだろう。

さて，Ishmael と Queequeg が一つの寝台を使うことの，儀式としてのあるいは象徴としての意義について考えてみたい。Ishmael と Queequeg とは，影になり日なたになり，たがいに，異質ながら，対称的な Counterpane である。雄弁と寡黙，文明と野性，白人と黒人，などたがいに対称的な資質を持っている。Ishmael は，生き残ることになるから，Queequeg とは，不死身と生身，など，ちょうど，双子座の Pollux と Castor のように，Ishmael と Queequeg は，たがいに正反対の特徴を持ちながら，二人でいるために，いっそうたがいの力が強められる，そういった存在であるようだ。ちなみに，Castor の名には車輪の意味がある。Ishmael は言葉でもって，Queequeg はほとんど沈黙したまま動作でもって，二人は，たがいに平行しながら，*Moby-Dick* のもつ世界観と世界像を表現する。Ishmael が，言葉では云えない，といて沈黙する部分を Queequeg が，身振りと行為でもって補っていく。しかし Queequeg が表現する表象は，言語をとまなわれないから，必然的に enigma として映り，作品の幅を深めるとともに，不明の部分を多くする。この手法は，おそらく，超絶主義の世界観を反映させたものとおもわれる。超絶主義では，自然界の言語は表象による，と考えられていたからである。自然界は，沈黙の言語つまり表象言語によって雄弁に語りかけているのであり，Ishmael の多弁と Queequeg の沈黙とはたがいに相対的に補いあって対位法つまり Counterpane を構成しているのである。

Queequeg が，帽子と靴をつけて，部屋の中をがたびし歩きまわる意味について考えてみる。

He commenced dressing at top by donning his beaver hat, a very tall one, by the by, and then—still minus his trousers—he hunted up his boots. (p. 55)

At last, he emerged with his hat very much dented and crushed down over his eyes, and began creaking and limping about the room, as if not very much accustomed to boots, his pair of damp, wrinkled cowhide ones—probably not made to order either—rather pinched and tormented him at his first go off of a bitter cold morning. (p. 55~56)

山高帽の beaver は castor ともよばれる。castor は，重い家具などにつける脚輪である。boot または shoe には，蹄鉄，車輪の輪どめ，などの意があり，castor も boots も，運搬のための車輪，に関係がある語である。これらは，すでにのべた馬車の比喩とともに，肉体を運ぶ車輪，輪廻の車輪，などの意味をもつと考えられる。Queequeg は第13章で，一輪車の喩えを語るが，彼は，生成の途上 (creature in transition) にあり，生成流転を身振りによって表わそうとしているようである。Queequeg が車輪を身にまとう儀式を行うこと

によって、今まで、形なく、幻のようなもやもやした、崩芽の前の状態であった、いわば物語の精神が、今、誕生し、時間となって流れ出そうとしているようである。*Spouter-Inn* の入口の通路に掛っている絵も、今、時間が流れ出そうとする瞬間を描いていた。*Queequeg* が寝台の下から、もがきながら出てくるのは、誕生を意味しているだろう。彼が、がたびし音をたて、びっこをひきながら歩くのは、重い車輪が、きしみ音をたてながら、ごとごとと始動するさまに似ている。*Queequeg* が寝台の下からはい出して室内を歩きまわるさまは、*creaking and limping* と描写されているが、これは、車輪の動きを表わす語でもある。車輪は、いま、*the first go off in the cold morning* を始めたのである。牛革の靴や、*Ishmael* が目覚めたとき首に馬のくびき (*horse-collar p. 54*) のような感触をおぼえたことなど、牛馬が車輪を索く心象を与える。*Queequeg* の索く車輪は、まだ復活にはあづかっておらず、どちらかと云えば、輪廻を引きつった、やがて死すべき運命の車輪である。

*Ishmael* と *Queequeg* が、双子座の *Pollux* と *Castor* にたとえられていることは、第17章 *Ramadan* でほのめかされているが、本章の *Counterpane* でもその意はくみとれる。*Castor* の語源は、*son of Zeus* であって、*Queequeg* が頭に載く *beaver hat* の *Castor* は、彼が高貴の生れであることを示す冠でもある。

さまざまな模様の *Counterpane* が点在しているが、それらは、それぞれたがいに無関係な点のままで存在しているのではなく、それぞれ与えられた特定の時間の中で、醸成され、有機的に索き合い、からみあって、それぞれの存在理由が、明きらかにされていく。ばらばらに平行して動いているかに見えたそれぞれの点が、左右つき合せられてはじめて、完全な一つの意味を補足し合って、やがて融合され、*Moby-Dick* が伝えようとしている、今だかつて語られたことのない規模の、幻想の世界がくりひろげられる。第132章 *The Symphony* の、*Symphony* の意味は、*Queequeg* の腕の色目模様が、掛けぶとんの模様と一致するように、単独で動いているかに見えたそれぞれの点が、結ばれて宥和し、新しい意義の存在へと昇華していくことをあらわしている。過渡期にあった生命が、変容をとげていく、その状態を *Symphony* の語は象徴している。

*Counterpane* が符合しあう状態は、*Ishmael* と *Queequeg* が寝台の上で結びつく姿で象徴されている。*Queequeg* の腕が *Ishmael* のからだを抱いていたり、脚を優しく *Ishmael* の上にのせている姿が、それである。*Queequeg* の腕や脚は、それぞれ *Counterpart* である二人を結ぶ糸である。*Ishmael* と *Queequeg* が一つの寝台の上で寝ることは、祭儀として意義がある、と受けとるべきである。二人が寝台の上で結びつく図を、さらに図式化して、二人をそれぞれ一本の柱と見たてるなら、二本の柱が一つにつながり、つまるところHの文字を構成することになる。Iの文字は、*Identity* を記号化したものと考えればよいだろう。Iは、一人称のわたくし、柱、煙突、自分自身、などを視覚化して表象し

たものである。HやIの字の視覚に訴える表象がこの作品にどのような意味をもつかは「『白鯨』のかくれた意味と象徴について(2)」(大手前女子大学論集第15号)(1985)参照。

Iの文字は視覚的には、神殿のわき柱にも見える。*Spouter-Inn*の炉の両側のjambは、神殿のわき柱に見えると、Ishmaelは云ったが、IshmaelとQueequegも、神殿を構成するわき柱に見える。薪架の上に置かれたCongo idolに相当するのが、Queequegのtomahawkである。Congo idolには瘤があるので、白鯨のかたちと重なり合う。白鯨は、さまざまな精神や現象を象徴するが、その一つは、男根神の象徴である。赤ん坊のような顔をしたtomahawk、生れて三ケ日目の赤ん坊のようなCongo idol、これらは、二人の友情という愛の結びつきから、なにかが誕生することを願う表象である。目に見えない精神を、かたちで表象しようとしたものである。IshmaelとQueequegが寝台に横たわる図は、結婚の秘儀であると理解されるべきである。

白鯨はまだ姿を見せず、Ishmaelの脳裡に幻として存在するだけである。白鯨の姿をIshmaelはしばしば、Cape Hornと関連させて言及している。Ishmaelは、Cape Hornを地の柱の象徴として見ているようであるが、おそらくその姿を、Pathagonian Andes(p. 30)の白い峰で象徴させてとらえているようである。Ishmaelが、瞑想による、内なる眼でとらえた、頭巾をかぶったような白い山(p. 30)は、Cape HornのPathagoniaの白いつののようであるが、これと白い鯨とは、重なり合っていて、Ishmaelが両側のわき柱の奥に見据えているものも、この白い山によって表象されているものである。

IshmaelとQueequegが共有する感情がエロスであるとしても、エロスは、死の上にかぶせた皮にすぎない。表面に止まらず、深く静かに潜行することによって、死は脱却されることができるのであろうから、二人のばあい、エロスは問題ではない。

IshmaelとQueequegが過した寝台は、象徴的にNew Bedfordの名で呼ばれてしかるべき性質のもので、Coffinの働きをする。彼らが新しい境地へ突き抜けるためには、死は避けることができないことになる。

かなうことなら、Pequod号が沈んで、彼岸の海に抜け出ることができ、そこでQueequegが、New Foundland(新しく発見された国)の浜にたどりついた犬のように、ぶるぶると水を切ることができますようにと、Melvilleはその可能性をねがっていたにちがいない。

... and presently, he drew back his arm, shook himself all over like a Newfoundland dog just from the water, and sat up in bed, stiff as a pike-staff,  
(p. 54)

彼岸の海とは、E. Dickinsonが、つぎのようにうたったものかもしれない。

If my Bark sink  
'Tis to another sea—

Mortality's Ground Floor

Is Immortality—2

つぎに、*Breakfast* について考えてみる。短い章は、注意を要する。enigma めいて、比喩の意味がはかりかねるからである。あるかなきかのかすかな比喩を、あえて解きおこそうとしないほうがよいかもかもしれないが、読みとるべく、かくされてある意図は、掘りおこされてしかるべきだろう。各章の表題は、ほとんどのばあい、かくれた意味をもっている。

*Breakfast* は、*Break* + *fast* であるのはいうまでもない。*fast* は、このばあい、しっかりと、どンドン、または、すみやかに、など副詞の用法だろう。*Break* には、掘りおこす (*plow*)、が考えられる。Peter Coffin が、「ほーい、食事だ」(*'Grub, ho!* p.54) と呼びかけるが、*Grub* にも、掘り起こす、の意がある。*Grub hoe* は、根株を掘るくわ、根掘りぐわ、の意がある。*Breakfast* と *Grub ho* は、合言葉のように、意味が符号する。*Break* には、土地を耕す、のほかに、暗号などを解読する、の意がある。*Grub* には、くわしく研究する、または、甲虫などの幼虫、の意もある。第3章で、*Ishmael* は、*Queequeg* を、幼虫から蝶に移る過渡期にある、といったが、根株を掘りおこすと、幼虫が出てくる。掘り起こす、は、二通りの意味につかわれている。

一つには、復活を予想した行為として、墓地を掘り起こす、の意である。甲虫 (*Scarob*) は、神聖甲虫とも呼ばれ、古代エジプト人が再生や豊穡の表象として、神聖視したものであった。また、*Ledyard* と *Mungo Park* の名が言及されるが、これらの名に共通するのは、*yard* と *Park*、どちらも、掘るための土地、というよりはむしろ、墓地、であるらしい。*Led* は *ledger* の略で、*ledger* には、墓地、の意がある。*Mungo* は、縮充された毛織物から再生された羊毛、であるから、この語も、復活、再生、に関係している。*Ledyard* は、*Siberia* を犬ぞりで横断し、*Mungo* は、*the negro heart of Africa* を孤独に長期間、旅をしたので、前者は、厳寒の地を、後者は、暗黒の地を、踏破したのであるから、どちらも冥府行を果たしたことになる。また、*England* と *Scotch* であるが、*England* は、語源にさかのぼって、天使の国、の意で、つかわれているものとおもわれる。*Scotch* は、第4章で *cutting up sone caper* に、燔祭の動物を切りぎざむ、の意があったので、同じように、切りぎざむ、の意が掛っているとおもわれる。

*Spouter-Inn* の朝食は、燔祭にあづかる食事のようである。水夫たちは、囲いの中の羊のようである。まず、*the bar-room* (p. 57) は、横木で囲われた柵の中、のようである。*barred with various tints* (p. 57) の *bar* は、横すじが入っている、の意である。また *the bar-room* の *bar* も、同じ語であるから、意味も、残響的に、同じ意味が、印象として浮び上ってくる。このような語の用い方は、ひんぱんに見うけられるので、逆に、同じ語が、二度、三度、用いられているときは、その語には注意を要することがわかる。

水夫たちは、囲いの中の羊にたとえられている。

... looking round as sheepishly at each other as though they had never been out of sight of some sheep fold among the Green Mountains. (p.57)

そのため、Queequeg がなま焼けの焼肉から目を離さなかった、は、Queequeg が、羊の燔祭をとりしきって、その肉を食べているような印象を与える。おそらく、そのために Queequeg は cannibal と、第6章 (p.60) で Ishmael によって呼ばれるのではないか。Queequeg は、Ishmael によって、かなりたびたび cannibal と呼ばれる。Queequeg は、上座に座り、氷柱のように冷静に、銛を朝食の席に持ちこんで、やたらに振りまわし、人々の頭をひやひやさせながら、食卓の上に差しのぼし、ビフテキを引っかきかぎでつかみとる。

Queequeg sat there among them—at the head of the table, ... as cool as an icicle, ... his bringing his harpoon into breakfast with him, ... reaching over the table with it, to the imminent jeopardy of many heads, and grappling the beefsteaks towards him, ... applied his undivided attention to beefsteaks, done rare. (p.58~9)

Queequeg は、斧パイプ (his tomahawk-pipe p.59) をくゆらせる、と書かれてあるが実は、銛がパイプになっているのである。彼の銛は、寝台の上で、彼と Ishmael のあいだに置かれて、まるで斧のような顔をした赤ん坊のようだった (a hatchet-faced baby p.54)。なぜ斧のようだと形容されるのか。それは Queequeg は、銛を司令杖のように振りまわしていたが (spooting his harpoon like a marshal's baton p.56)、彼の銛が、斧の権威標章 (fasces) のようである、と示したいためだろう。fasces は、束ねた薪の中央に斧を入れて縛り、古代ローマ時代につかわれた。Queequeg が、小羊の食卓をとりしきる役割を担っていることを示すために、彼の銛が、斧のようだと表現したのだろう。また斧は、戦斧として、人の頭を刈り取るためのものであるから、Queequeg が、cannibal であることを示すためのものだろう。

掘りおこす、には、もう一つの意味がある。それは、Counterpane の概念からはじまる。掛布団の複雑な市松模様が、Queequeg の、複雑な太陽の当り方をした彼の腕の色模様と、偶然にせよ必然にせよ、ぴったり符合する、という考え方からはじまる。もし人の内面が、外界の事物や現象に写し出されるものなら、同じように、人の内面は、その人の顔面の相にも反映されているにちがいない、という考え方を Melville は持っているようである。79章 *The Prairie* 参照。Queequeg は、文盲であるうえ、言語表現には、ほぼ無縁である。しかし彼は、動作や行動によるばかりでなく、顔の造作や皮膚の色調、文身の模様など、言語による以外の、あらゆる方法で、文字どおり身をもって、彼の人生の目的、資質、世界観などを表現する。Queequeg の肉体は、表象そのものである。精神と物質は、

たがいに Counterpane を織り上げて、両者の、いうなれば二枚の、Counterpane の色目模様は、ぴったり符合しあうことになる。Queequeg の顔を見よう。

But who could show a cheek like Queequeg ? which, barred with various tints, seem like the Andes' western slope, to show forth in one array, contrasting climates, zone by zone. (p 57~8)

Queequeg の頬は、複雑な色調のため、ちょうど立体模型の地図の山岳地帯のように見え、一望のもとに、南北に多くの緯度数を占める Andes 山脈の西斜面のようである。このことはなにを示しているかといえば、Queequeg の顔は、南アメリカ大陸の西側の輪郭を表わしていることになる。Andes 山脈は、南アメリカ大陸西側のほぼ北端から南端にわたって連なり、ちょうど、人の横顔の額と鼻にかけての輪郭に見える。そればかりでなく、南アメリカ大陸全体が、人の頭部に見たてられることができる。Queequeg が売っているしゃれこうべに見たてることができる。Cape Horn のあたりは、鼻孔の位置になる。Queequeg がパイプをくゆらせる姿が、たびたび言及されるが、それは、Pathagonia Andes の南端の、Cape Horn の近くにある、煙の山と呼ばれる白い峰を模した行為ではないかと思われる。Spouter-Inn の章で、Ishmael と Queequeg が、パイプを交わし飲みすが、これは、アメリカ土人の友好のしるしであるばかりではないとおもわれる。Breakfast の章でも、朝食後、Queequeg がパイプをくゆらせているが、Melville は、パイプにたいして、ひじょうにこだわりを見せる。そのことは、'I and My Chimney' の作品においてあきらかである。Melville は、解釈上重要なポイントは語らず伏せたままにしてしまうが、おそらく、パイプと Cape Horn との連想上のつながりは、いつも Melville の念頭にあったのではないかとおもわれる。Galapagos 諸島をはじめ、『Beagle 号航海記』の航跡に Melville は興味を示したはずなので、おそらく Melville は、『Beagle 号航海記』で語られている Pathagonia Andes の、白い、煙の山については、知っていたのだろう。

人の顔の骨相と地図にあらわれた地形との類似には、偶然の一致などという、単発的な関係ではなく、なにかしらもっと原理的な相対関係があると、Melville は受けとっていたのではないだろうか。すくなくとも Queequeg の顔と Pathagonia Andes の地形とは、彼の腕の文身と掛布団の模様同様、たがいに Counterpane になっている。内面の精神と外面の事象が Counterpane になっているのにとどまらず、外面の事象間にも、Counterpane が存在しうる、と Melville は考えていたのかもしれない。人の顔の骨相も、地表上の地形も、精神の表象であるなら、眼に見えるかたちの類似点か、人の身体と、地表の形状に、あらわれることになるのは、類推上、当然の帰結になるだろう。潜在意識という概念をもってしても、説明できるだろう。人の無意識層が共通で、そこに同じ共同幻想が存在しうるなら、人はそれぞれ一個の小宇宙であることになり、多くの小宇宙が存在し

ていることになる。そして多くの Counterpane が存在していることになる。それらの小宇宙は、同心円をえがいて、同心円軸上を動いていることになる。Peter-Coffin が、掘り起こせ、というとき、文字どおりではなく比喩的な意味にしる、人の顔の表面にあらわれるものの意味を読み取るように、という意図があるものとおもわれる。その意図は、つぎの文にもあらわれている。一笑に付してしまいたくなるような、つまらないことの中に、案外意味があるものだ、とのべている。

... a good laugh is a mighty good thing, and rather too scarce a good thing, ... if any one man, in his own proper person, offered stuff for a good joke to anybody, let him not be backward, but let him cheerfully allow himself to spend and be spent in that way. And the man that has anything bountifully laughable about him, be sure that there is more in that man than you perhaps think for. (p. 57)

ここで云われる、おかしいこと、とは、Queequeg が、まじめな顔をして肉切れを引き寄せている様子ばかりではない。水夫たちが羊のようにおずおずして、田吾作まる出しであることなどもさしている。このことにも意味がある。水夫たちは、羊にたとえられているばかりでなく、樹木にたとえられている。

... a brown and brawny company, with bosky beards; an unshorn, shaggy set, all wearing monkey jackets (p. 57)

彼らは褐色で筋骨たくましく、樹木の茂ったようなひげは、かみそりをあてておらず、もじゃもじゃ面の連中である。company や set も、ひとかたまりになって、の意から、樹木の茂る森林をおもわせる。みな monkey jacket を着ているが、この服は、四角い箱 (chest) のような形をして胸 (chest) をつつむから、同じように樹木の幹をおもわせる。Queequeg も monkey jacket (p. 56) を着ている。chest という語のひびきは、つぎの章の *Streets* にも残ってひきつがれ、その主題の表象になっている。水夫たちは、梨の木やマホガニー材に、たとえられる。

This young fellow's healthy cheek is like a sun-toasted pear in hue, and would seem to smell almost as musky; he cannot have been three days landed from his Indian voyage. That man next him looks a few shades lighter; you might say a touch of satin wood is in him. (p. 57)

この文は、水夫たちの顔色の陽焼けの濃淡を樹木にたとえてあらわしている。梨の果実の形やマホガニー材は、Coffin に連想がかけられているだろう。musky は、インド航路の、赤道付近の香料諸島、the Moluccas や Sumatra (p. 35)、に掛けられたものだろう。musk は、じゃこうの testicle から採取されるので、性的な連想をもつ。第 87 章 *The Grand Armada* 参照。水夫たちの顔の陽焼けの程度が、その顔に、樹木や森林の発育状

態となってあらわれ、まるで森林の地図を見るようだ。水夫たちの陽焼け程度から察すると、彼らの精神の発達段階は、VermontのGreen Mountains程度である。Queequegのように、赤道下まで南下し発達しているのに較べると、水夫たちはまだ北緯、Vermontあたりにいる。Loomingsで、Ishmaelは、羊飼いのいる山野の風景をえがいて見せたが、そのとき、Tennesseeの詩人がRockaway Beachまで徒歩旅行を決意すれば(p.25)、と書かれているが、Tennesseeには、Blue Mountainがあり、緯度もVermontにくらべて、相当南にある。Rockaway Beachは、岩の道の海辺、で、Bedfordの堅い砦、Coffinの台、などとあい通じるものがある。

Breakfastで、樹木の比喩がつかわれているが、それは樹木が生命の象徴だからだろう。またCoffinの材料だからだろう。樹木の幹が、中空になっていて、そこに磔刑像が入っているように見えた(p.20)ことがあわせて考えられる。Yet, here were a set of sea-dogs, (p.58)のsea-dogは、老練な船乗り、の意のほか、気象の用語として、霧峰(fog bank)の中にみられる明るい点、という意がある。そこから霧が晴れてくる点である。Moby-Dickでは、霧のような、もやもやした得体の知れないものが大きな存在感をもって迫ってくるが、こういった幻の部分へ踏みこんでいくための突破口が、fog-dogの眼のような点であるかもしれない。

つぎの文のdogは、べつの意味をもつ。

But perhaps the mere crossing of Siberia in a sledge drawn by dogs as Ledyard did, or the taking a long solitary walk on an empty stomach, in the negro heart of Africa, which was the sum of poor Mungo's performances—this kind of travel, I say, may not be the very best mode of attaining a high social polish. Still, for the most part, that sort of thing is to be had anywhere. (p.58)

dogには、firedog, andironの意がかくれているようである。andironには、左右2本の金属柱がついているので、神殿の二本のわき柱の意が婉曲に感じられる。この文は、字義どおりでは、彼らの冒険には海がかかわっていないから価値がない、の意だろう。high social polishには、高度な人生修錬、の意がうかがわれ、たんなる朝食作法をこえた、精神的なものを指しているだろう。この文は、奥義がわからなければ人生の修錬の方法も目的もわからないと示唆しているようにおもわれる。“Grub, ho!” (=Grub hoe)は、符諺になっていて、かくれた意味を掘りおこさなければ、作品の理解が見当はずれになることも示唆しているだろう。

BreakfastのBreakには、刈り取る、の意がある。Peter CoffinとIshmaelが、Queequegの頭について問答する。

“I tell you what it is, landlord,” said I, quite calmly, “You’d better stop

spinning that yarn to me—I'm not green." "May be not," . . . "but I rather guess you'll be done brown if that ere harpooneer hears you a slanderin his head." "I'll break it for him," said I, now flying into a passion again at this unaccountable farrago of the landlord's. "It's broke a'ready," said he. "Broke," said I—"broke, do you mean?" (p. 44)

Queequeg の頭がすでに broke である、のは、南アメリカ大陸の輪郭を、しゃれこうべ、とみたてて、それと Queequeg の頭を Counterpane とみなすなら、Queequeg の頭が broke である、の意味が通る。Queequeg の頭は、しゃれこうべを意味することになる。つまり Queequeg の頭骨は、しゃれこうべの丘、Golgotha, Calvary を形状的に象徴し、死を通過しなければならないことが、しかし同時に復活も予示されていることが、うかがわれる。掘り起こせ、には、以上のような内容を掘り起こせ、の意があることになる。

しゃれこうべが、復活のための堅い基盤になるという考え方は、キリスト教の根底をなしており、墓石や石ころ、岩場などが、生命を暗示する表象として、聖書には数多くあらわれる。Adam は、土塊から起こされ、土塊に帰ったが、再び土塊から起こされるであろうという期待と、それを約束するような章句が、くりかえし聖書にあらわれる。たとえば、主はわが岩、わが城、わたしを救う者、わが神、わがより頼む岩、わが盾、わが救いの角、わが高さやぐらです (Psalm 18:1~2)、や、神はこれらの石ころからでも、Abraham の子を起こすことができる、斧がすでに木の根もとにおかれている (Math, 3:9~10) など、岩は、不毛の印象とはうらはらに、復活の表象として、聖書にかぎりなくあらわれている。わが救いの角、や、より頼む岩、のうちもっとも巨大なものは、Cape Horn で象徴される南アメリカ大陸、つまりしゃれこうべの形をした南アメリカ大陸、であると Melville は受けとっているようである。それを Melville は、Queequeg の頭と重ね合せて、Queequeg を head peddler (p.43), cannibal と呼んでいる。聖書の、斧が木の根もとにおかれている (the axe is laid unto the root of the trees) は、Breakfast の主題になっていることがわかる。神はこれらの石からでも Abraham の子供を起こすことができる (God is able of these stones to raise up children to Abraham) は、*Moby-Dick* 全体の主題にかかわりをもつ。Ishmael が使った寝台は、Peter Coffin と妻の Sal が婚礼の夜に使ったものだが、Sal は、Sarah の略称であるから、Peter Coffin は Sarah の夫の Abraham であるかのように暗示される。聖書では Abraham は Ishmael の父である。これらの石から Abraham の子どもたちを…には、Ishmael もふくまれていることになる。Ishmael は、荒野に追放されたが、神は、Ishmael を大いなる国民とするであろう (Gen. 21:9~21) と約束された。Ishmael は、荒野の王である。荒野といっても、キリストが40日間の試練に耐えられた荒野も、写真などで見るかぎり、岩の台地である。それは、あたかも岩の Bedford である。Ishmael は、Arab の父であると一般にい

われているが、聖書には具体的には書かれていない。Melville は、Ishmael をなにか精神の内面の世界を受け継ぎ、復活を司さどる人のようにえがいている。神はこれらの石から Abraham の子供たちを…は、この章句の上に Melville が構築した Ishmael のこの作品における役割を具体的に示す手掛りを与えているようにおもわれる。聖書では Ishmael は、皮袋の水がつきて、木の下におかれる。母親の Hagar によって命をたたれようとしたとき、Ishmael の泣き声が神によって聞きとどけられ、木の下を掘ると、水が出てくる。Loomings の瞑想画の中の樹とその樹の中の磔刑像は、聖書における Ishmael と彼の足もとにおかれた木に、心象が重なり合ってくる。Ishmael はしばしば Hyena にたとえられているが、犬は冥府の番犬であるためと、Hyena が朽ち肉を食するためであろう。これは、Queequeg が、羊のようだと言われ形容される水夫たちの頭上ごしに、生ま焼け肉を銚で引き寄せる姿と重なり合って、死と復活の通過儀式と受けとれる。儀式の祭司としての役割は、Ishmael が受けもつべきであろうが、この章の寝台のもつ意義は、Ishmael と Queequeg の結婚の秘儀にあり、二人が形に影が沿うように一心同体であることをあらわしている。二人は counterpart であり、Ishmael 同様、Queequeg も Hyena である。犠牲の肉が Hyena に食べられことによって生きるように、水夫たちはこの朝食の儀式によって死を予感しつつ、復活を希求しているかのようである。聖書で神が Ishmael に約束された国を、Melville は復活との関連においてとらえて、Moby-Dick のような幻想の世界を組み立ていったのではないかとおもわれる。Ishmael もまた Peter Coffin と同様、岩と Coffin を司どるのである。聖書のイメージをかりるなら Peter Coffin と Ishmael は、父と子として同じ仕事をひきつぐように想定されている。Peter Coffin は、landlord であるが、landlord には、土地の所有者、つまり、一国をひきついだ人、の意がうかがわれる。Cape Horn は、Pathagonia Andes の先端にあり、その色は、暗い黄色がかかった紫色をし、Queequeg の陽焼けした肌の色と同じであって、深くけわしい岩盤の色である。Queequeg は、朝食後、まさかりのパイプに火をつけ、ゆっくりくつろぐ。Cape Horn は Pathagonia Andes の南端にあり、Queequeg の顔と対比させるなら彼の鼻にあたる。Cape Horn の近くには、煙を吐く白い山、といわれる山がある。おそらく、New Bedford を岩山にみたてたばあい、この岩山に不死鳥がよみがえる火山のイメージを加味したものとおもわれる。炉や煙突もパイプと同様、火山の表象である。New Bedford の地名には、以上のような象徴的な意味がかかっているため、実さいに、Melville が New Bedford の川向いの Fairhaven から出航しており New Bedford から出かけたのではないという事実などは、さしたる意味はなくなってくる。

注：1. 使用テキストおよびページ数はつぎの版による。

MOBY-DICK or The Whale ed. by Charles Feidelson Jr. (Bobbs Merrill)

2. Johnson ed. : The Poems of Emily Dickinson, Vol. III, p. 858 from S. Ando : ZEN and American Transcendentalism p. 9